



留学の意味： 早石修記念海外留学助成による留学体験記

2017年度採択者 鈴木 洋

2014年4月から2020年4月までマサチューセッツ工科大学（MIT）コークがん総合研究所のPhillip A. Sharp研究室に約6年間留学し、2020年5月から名古屋大学大学院医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター分子腫瘍学教授として新しい研究室をスタートしております。この間、2017年度早石修記念海外留学助成の支援をいただき、この場を借りて深謝申し上げます。また、大変貴重な機会を与えてくださった諸先生方ならびに関係者各位に厚く御礼申し上げます。

私は、留学までマイクロRNA（microRNA）とがんの関係について主に研究をしてきたのですが、留学を契機に、次世代シーケンサーを使った網羅的解析を本格的に勉強し、現在、次世代シーケンサー・バイオインフォマティクス・ゲノム編集などの技術躍進に基づく大規模データ群の統合的解析を通じて、ゲノム・エピゲノム・転写・RNAネットワークの関係性を丹念に読み解き、遺伝子制御の作動原理や疾患のメカニズムを探索する研究を推進しています。

MITでも日本人の留学者はめっきり減ってしまっているのが現状ですが、なぜ留学するのか、私の考えを少し述べます。ここで、森鷗外や夏目漱石をだすのはおこがましいのですが、あえて少し触れます。この2人の留学はその様相において大分異なるものですが、一方で、「西洋を学んで日本に持ち帰る」、「自身が日本人であることを感じながら、日本を外の視座から主観的に考えるようになった」という共通点もあると考えます。特に、後者は、彼らが寄与した近代日本語の確立にも影響を及ぼしたものと考えま

す。

私にとって、留学の大きな収穫、そして、外の視座を構築する上でやはり大きかったものは、Phillip A. Sharpとの出会いです。研究（思考・実験・解析）をしていると、時々あれこれ！？という時に遭遇します。そういうとき、自分が間違っているのではと思いながら恐る恐る、しかし、必死に手探りで、そのアイデアなどを形のあるものにしようと考え続けます。うまくいくといい成果・問題が解決した状態になるのですが、ここで人は余韻に浸りたくなってしまう、あるいは、疲労もあって満足しなくなってしまう。しかし、一方で、こういう時、実は、これが成立するのであればあれはどうなんだ？という新しい問題が出てきます。解いた本人も何となく気付いているのです。Phillip A. Sharpはこういう時にふらっとやってきて、楽しそうに、その「あれはどうなんだ？」を掲げて、もう少し先に行こうよ、というのです。

これが私の見て知ったMITです。欧米は今も柿の種を植えて続けていると思います。本助成の支援により今後も多くの方々が海外留学されることを強く願います。

最後に、コロナ禍の中で実はPhilに挨拶をすることができず、がらがらの飛行機で今年の4月に帰国したわけですが、よいサイエンスをして、Philや秘書のMargaritaに挨拶をしにいきたいと思います。Hello, Again. 彼はどんなサイエンスをしているのか聞いてくることでしょう。

（現 名古屋大学大学院医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター分子腫瘍学）

※早石修記念海外留学助成について

日本生化学会では2017年度より「早石修記念海外留学助成」の募集を開始いたしました。この助成制度は、日本の生化学会に多大な貢献をされた故早石修名誉会員（2015年12月17日ご逝去）を記念して、小野薬品工業株式会社様のご寄付によって設立されたものです。助成額は1件500万円、毎年8名まで選出します。応募資格その他詳細は学会ウェブサイト（<http://www.jbsoc.or.jp/support/hayaishi>）掲載の募集要項をご覧ください。